

岩手県環境保健研究センター Iwate Prefectural Research Institute for Environmental Sciences and Public Health (I-RIEP)

kanpokenbunroku

環保研聞録 ~I-RIEP Journal~ 第9号



2017年1月



「岩手県環境保健研究センター」では、県民のみなさんの健康といわての環境を守るため、健康・環境に関する科学的・技術的拠点として、次のような業務に取り組んでいます。

- ① 県民のみなさんの健康や環境に被害のおそれがある場合の対応
- ② 健康と環境を守るための試験検査・監視測定
- ③ 行政の課題に対応した調査研究
- ④ 技術支援・情報発信・研修指導

広報誌「環保研聞録 ~I-RIEP Journal~」では「環保研(かんぼけん)センター」の取組や健康・環境に関する情報を定期的にお届けしています。

環境保健研究センター「一般公開」を開催しました

平成 28 年 11 月 23 日(水・祝日)に当センターの「一般公開」を開催し、家族連れなど 300 人を超える多くの方々に来場いただきました。

当日は、当センターの職員による環境・保健・衛生をテーマとした体験コーナーや展示ブースに加え、岩手県下水道公社の御協力による「下水道出前講座」、環境学習交流センターの御協力による「新聞エコバックづくり」や実験キットによる発電体験などが行われました。

ゲームやクイズ、試食などの展示を通じて、大人と子供が、一緒にいわての自然や環境を学んでいました。また、展示を見て食の安全や健康を意識した方も多かったのではないのでしょうか。

施設内を巡る「見学ツアー」も開催され、日頃は見ることの出来ない環境保健研究センターを多くの方々にご覧いただきました。



写真1 釣りゲームで環境を学ぶ



写真2 そぼっちも勉強中

JICA 研修でパキスタンの医師が視察に訪れました（保健科学部）

平成28年12月13日、独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する「母子保健における定期予防接種研修（研修期間：平成28年12月12～22日）」の一環として、パキスタンで予防接種事業に携わる5名の医師が当センターへ視察に訪れました。

当日、センター内ホールにあるマルチビジョンでお出迎えしたところ（写真1）、大変喜んでいただき、研修生の皆さんは交互にマルチビジョンを背景に記念撮影をしていました。

はじめに、研修室で当センターの業務紹介と保健科学部が担当する感染症発生動向調査事業の説明を行った後（写真2）、ウイルス検査室、遺伝子検査室、電子顕微鏡室及びBSL3^{※1}検査室を案内し、機器・設備や検査方法等の説明を行いました（写真3）。

研修生から、パキスタンでは日本の感染症法に相当する法律の整備に取り組んでいるとの説明

があり、保健科学部が岩手県感染症情報センターとして行っている県内の感染症情報の収集、分析、県民・医療関係者等へ情報を還元する感染症サーベイランス業務について熱心に耳を傾けていました。

休憩時間、用意したミカンが好評で、パキスタンでは「キヌー」と言い、味も見た目も一緒に喜んで召し上がっていただきました。

視察の後、研修生を代表してパキスタン国ハイバル・パフトウンナー州のEPI^{※2}副所長アブデュル・ハメッド・アフリディ氏から感謝の言葉と記念の盾をいただき、短い時間ながら温かな国際交流の時間を持つことができました。



写真1 マルチビジョンでお出迎えしました



写真4 友好の記念として盾をいただきました



写真2 研修風景

写真3 検査室見学の様子

※1：BSL（Biosafety Level）3 検査室

病原体が外部に漏洩することがないように封じ込める構造になっており、病原体を安全に取扱うことができる検査室のことです。

※2：EPI（expanded program on Immunization）

拡大予防接種プログラムのことで、世界保健機関（WHO）とユニセフなどが協働して、5歳児未満児死亡の大きな原因であるポリオ、麻しん、結核、破傷風など6種の疾病について予防接種を行うものです。

下痢性&麻痺性貝毒の研究を行っています (衛生科学部)

●貝毒とは？

ホタテガイやカキなどの二枚貝は、海水中のプランクトンを餌にしていますが、時に有毒プランクトンが食物連鎖によって蓄積し、摂食したヒトが中毒症状になることがあります。日本で主に問題となるのは下痢性貝毒と麻痺性貝毒です。

日本では出荷前の検査により安全性が確認され、規制値を超えるものは出荷規制となります。

●貝毒の検査法

検査法として、国際的に採用されてきたのはマウスを用いた試験でした。しかし準備に時間が掛かることもあり、迅速かつ正確なデータを得るために、国際的に機器分析法へ移行する流れとなっています。

近年、下痢性貝毒は機器分析法が開発され、日本でも平成27年に移行しました。

一方、麻痺性貝毒は、毒成分が多種に及ぶことやpHの条件で変換が起きやすいこと等から、国内に限らず海外でもマウス試験法から機器分析法へは移行していません。

●当センターの取り組み

分析機器(LC-MS/MS)を用いて貝毒の分析法について研究を行っています。

下痢性貝毒に関しては、精度の高い分析を行うため、平成26年度よりホタテガイの前処理方法の検討を行っています。

麻痺性貝毒に関しては、平成28年度より研究に着手し、分析上の課題を一つ一つ解決しているところです。

今後も、県内の食の安全安心のため、機器分析による貝毒の研究を進めていきます。



写真 分析機器 (LC-MS/MS)

中国・大連理工大学環境学院と「交流に関する覚書」を締結しました

当センターでは、2008(平成20)年3月より2017(平成29)年3月まで「中国と岩手県の特徴を生かした有機フッ素化合物の環境リスクの解明」について、大連理工大学環境学院と共同研究を実施しています。

平成28年10月、これまでの取組に関する御礼及び研究成果のとりまとめ等についての協議を行うため、当センターの津田修治環境保健研究アドバイザー(岩手大学名誉教授・日本獣医生命科学大学客員教授、写真左)と西村所長が中



国・大連理工大学を訪問しました。滞在中は、津田アドバイザーによる講義や今後の両者間での交流の推進についての意見交換等を行いました。

なお、引き続き両者間の交流を一層推進する証として、新たに「交流に関する覚書」を締結しました。

県内における今シーズンのインフルエンザの流行について（保健科学部）

今シーズン（平成28年第36週～平成29年第35週）、岩手県では第45週（11月7～13日）に県全体の定点あたり患者数※が1.54人となり、流行開始のめやすである1.0人を上回り、例年より早く流行入りしました。平成29年第2週（1月9～15日）には10.65人となり、注意報値である10人を超えています。第3週は17.29人と患者数がさらに増加し、流行が拡大しています（図参照）。

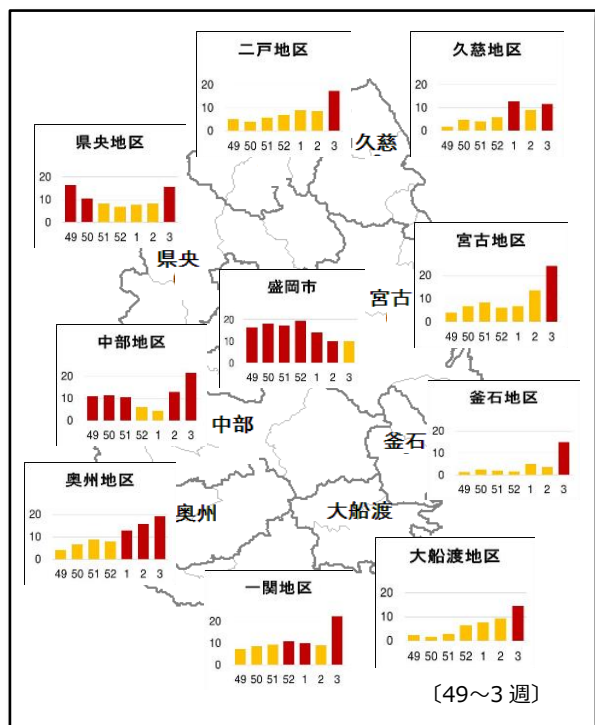


図 保健所別インフルエンザ定点あたり患者数の推移
 定点あたり患者数： ■ 10未満 ■ 10以上

インフルエンザの主な感染経路は咳やくしゃみの際に口から出る小さな水滴（飛沫）による飛沫感染です。咳やくしゃみが出るときはできるだけマスクをすることや、マスクがない場合は、ティッシュや腕の内側などで口と鼻をおおい、顔を他の人に向けられないなど咳エチケットを心がけましょう。

また、流水・石鹸による手洗いは手指など体についたインフルエンザウイルスを物理的に除去するために有効な方法です。（正しい手洗い方法 <http://www2.pref.iwate.jp/~hp1353/kansen/index.html>）

保健科学部が実施したウイルス検査では、A香港型（H3亜型）ウイルスの検出が続いています。今年度のインフルエンザワクチンは、A型2種類、B型2種類の計4種類が含まれた4価ワクチンです。ワクチンの予防効果が現れるまで約2週間かかり、その効果は5カ月程度持続すると考えられていますので、早めの接種が勧められます。

※：定点あたり患者数

県が指定した定点医療機関から一週間にどのくらいの患者報告があったかを表す数値で、この数値によって、各地での感染症の流行の状況が把握できます。

【編集後記】

朝、家を出ると凜とした寒さを感じて身が引き締まります。冬本番といったところでしょうか。

岩手県環境保健研究センターでは、いわての豊かな自然の保全に関する調査研究にも力を入れています。厳しい寒さが続きますが、冬のいわてを楽しんで過ごしたいですね。（大）

《編集・発行》岩手県環境保健研究センター 企画情報部

盛岡市北飯岡一丁目 11-16

TEL 019-656-5666 FAX 019-656-5667

E-mail : CC0019@pref.iwate.jp

ホームページ <http://www.pref.iwate.jp/kanhoken/>

